

批評・紹介

唐代之交通

——中國經濟史料叢編 唐代篇之四——

國立北京大學出版組發行
菊版一五〇頁、圖版三葉、定價七角

昨年末、天津益世報の『食貨周刊』に陶希聖の「唐代寺院經濟概説」と武仙卿の「唐代土地問題概説」が掲載せられ、その後『食貨半月刊』本年二月十六日刊にも轉載せられた。それには唐代經濟史料寺院經濟篇（又土地問題篇）序といふ副題が附いてゐるので陶氏の率ゐる食貨派の人々に經濟史料集編纂の計劃のあることを知つた。それと相前後して『張菊生先生七十生日記念論文集』が刊行せられたが、その内に陶希聖の「唐代經濟景況的變動」といふ興趣ある論文が収められてゐる。その末に「一九三六年十月四日取北京大學法學院中國經濟史研究室輯錄唐代經濟史料成書之餘有關一般社會景況者若干條寫成此文」とあるによつて、この事業の

既に完成せるを知り附印の日を私かに待望したのである。

茲に紹介しようとする唐代之交通はその待望した史料集の一篇である。本書の見返しによると、この經濟史料叢編は北京大學教授である陶希聖外二名が主導し武仙卿・鞠清遠外二名が輯録したものである。而して交通篇は鞠清遠が主としてその編纂の任に當つてゐる。是に由つてこの史料叢編々纂の大略を想見することが能る。まづ交通篇に就いてその史料抽出に用ひられた文獻を見るに正史・政書・地志はもとより説部、文集に及んでゐる。又支那の史料のみならず我が大唐僧の紀行、例へば圓仁の入唐求法巡禮行記、圓珍の行歷抄・餘芳編年雜集等をも涉獵してゐる。この篇に用ひられた文獻だけでも六十種に上つてゐる。

次には等の史料を分類整理して五十二項目とし、前に序文を附してゐる。前半卅二項は陸上交通、後半廿項は水上交通である。夫々に交通法規・機關・路程を列敘してゐる。從來唐代の陸上交通を研究したものに陳沅遠の「唐代驛制考」（『史學年報』卷五期所載）がある。その第六章驛名錄は、各書に見ゆる驛名を輯録したものの

で陳氏の力を致した所であらう。その後姚家積が「唐代驛名拾遺」(『禹貢半月刊』五卷二期所載)を著して陳氏の闕を補つたのであるが、我が鈴木俊氏は去る六月の史學會大會東洋史部會に於て陳・姚兩氏の搜集未だ至らざるを述べ、殊に驛名を豊富に掲載せる『入唐求法巡禮行記』や『蠻書』を利用してゐないことを指摘してゐるのであるが、(『史學雜誌』四十八編七號一三三頁以下)この史料叢編では兩書ともに見逃さず輯録してゐる。この一事からでも本叢編編纂の無意義でないことは十分に主張できるのである。

水上交通に關しては概説したものはないが、時の首都長安と江南とを結ぶ水運に關しては既に青山・濱口・外山諸氏の論考があり、その水路の一部汴河に就いては青山氏の詳細な考證がある。(『東方學報』東京第二冊所載)然しこの史料叢編を材料にしてこの水路を考へてみるのも興味の多いことである。

交通法規は律令格式に互るが、本書には衛禁律と水部式を收録してゐる。仁井田氏の唐關市令拾遺を参照せば令若干條を追録し得るであらう。又「過所請求書及格式」の項に圓珍の過所二通が載せられてゐる。そ

れは『大日本佛教全書』所收の「餘芳編年雜集」及び「唐房行履錄」に據つてゐるが、是等の過所は數年前東方文化學院に於て影印してゐるのであるから、それを利用すべきであつたらう。或は卷頭の圖版としても恰好のものである。「入唐求法巡禮行記」や「行歷抄」も『大日本佛教全書』所收本を用ひてゐるが、前者は東寺觀智院藏本が、後者は石山寺藏本が影印されてゐるのであるから之亦活用すべきであらう。殊に前者は支那に於て廉價版が印行されてゐるのであるから尙更である。

上述の書の『大日本佛教全書』所收本を用ひてゐることは本書には明記してゐない。是等の書のみならずすべて引據せる文獻のテキストに就いて何等言及してゐない。自今陸續各種の史料——現在では本書の外土地問題・寺院經濟の二篇である——が刊行されるから或はその完結を俟つて引據文獻の解題がなされるのかも知れぬ。それでないといふやうな校語が突忽として現れると、我國に於けるよりも本國支那に於て當惑する人が多からうと思ふ。

以上は史料そのものに就いて述べたのであるが、そ

れを整理するに當つても注意すべきことが少くない。
 例へば橋渡の項に蒲津と題する條がある。蒲津に關する五種の史料を列敘してゐるが、圓珍も亦この津を渡つたからその情景を記してゐる。その記事はこの條にはなく「長安至洛陽」の項に入つてゐる。記事そのものとしてはこの項に入れる方が適當であらうが、蒲津の條へも、この記事を参照すべきことを注記して、史料全體に有機的聯關をもたしめたいと思ふ。又路程のはじめに『元和郡縣志』に記せる每州の八到に據つて路線を表示して置けば一層便利ではなからうか。陳沅遠の前掲論文の驛程紀要はそれを試みたものであるが、之をそのまま轉載してもよかつたのである。現にこの史料集には『中西交通史料匯編』の如き編纂物を利用してゐるのであるから、差支へないであらう。色色注文もあるが、折角この史料集を活用し、補正して完備なものにすることが我々の役目であらう。(森)